
幸福度計

夏樹 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福度計

【Nコード】

N8940Z

【作者名】

夏樹 真

【あらすじ】

HPという指標が導入された社会のお話。
本編が、あらすじのようになっていますが
一応これが本編です。

短編執筆練習作品2作目

「12月4日金曜日。今日のかに座のHPは、プラス6です。外に新しいアクセサリーを着けて出かけるとさらにプラス2されます。」

*****幸福度計*****

絶対幸福度、幸福感受性神経活性度測定法、ハピネス指数。

呼び方は色々あるが、一般的な通り名は、HP^{えいちぴー}

HPが導入されたのは、21世紀になってからで、情報化社会の進歩が背景にある。

インターネットを始めとしたデジタル情報の増加、生活の多様化に伴い、

人々は、「どう生きる事が幸せなのか？」という問いについて考え始めた。

例えば大金を稼ぐ事。それは、経済的な意味において確かに幸せだ。大きな家に住み、働かなくても生活は安泰で、ちよつとした休みで海外に出かけたりする。

分かり易い幸福の例だが、同時に富を失う不安感、犯罪へ巻き込まれるリスクが上がる事もある。

金を得るために、友人等を失うかもしれないし、なにより金持ちになるのは大変だ。

金持ち⇨幸せの方程式は単純には成立しないのだ。

「どう生きる事が幸せなのか？」
もちろん人によってその回答は異なるのだが、その曖昧さ、情報社会の発達による選択肢の多さが災いした。
誰だって、3つの中から一つを選ぶ事はできる。でも、3000の中から最適な物を選べと言われたら・・・。。
きつと、ほとんどの人は最初の100を見た所であきらめて適当に選ぶだろう。
そして、残った2900に本当は魅力的なものがあつたのでは無いかという妄想に捕らわれるのだ。

自分が何者になるか惑う若者が続出し、迷つた結果どの選択肢も選べない半端な世代、何者にもなれなかつた世代が誕生してしまつた。いや、もつと正確に言うなら特に意思もなく、何者かになつてしまつた世代、モチベーションが低く、能動的に選ぶ事が苦手な世代だ。その影響で特に企業の力は下降の一途をたどつた。

焦つた政府は、職業の魅力を整理し順位をつける事にした。といつても、自動車工場の工員と、パン屋の店員、銀行員、政治家、などの職業に対して一概にこれが良い、これが悪いなどと決めることはできないという事は分かつていた。そこで、説得力を増すために科学的な裏付けを求めた。年収、社会的強信用度といった指標とともに、幸福を感じる神経の活性度を測定し、肉体を感じる幸福度と社会的な視点の幸福度を合算し、絶対幸福度とする事を決めた。
今までの、社会的な見方を元にした点数と、実際の業務従事者の幸福度測定の結果を足し込んで、その職業のHPとしたのだ。

人々はHPによってより具体的に目標を測る事ができるようになった。

また、このHPはだんだんと日常生活にまで浸透し、ついにはスーパーに出回る野菜にまで、HPが付くようになった。
つまりは、

北海道産 じゃがいも 1袋 350円 一食あたりHP25

といった具合で。

そして、人々はいかに日々HPを高めるかについて考えるようになった。

「ねえ、今日の私の服どお？どお？今流行の着るだけでHP300 verの新作なんだけど？」

「いいじゃん！かつこいいよ！それ。高そ〜。ねえねえいくらだったの〜？」

「いいよな〜お前の会社、社員の平均HP、日本ベスト10に入ってるぞー。」

「そりゃあいいけど、給料はそこまでも無いぞ。」

「バカ言えよ。いつくら給料良くても休み無い俺よりずっと良いって！あーあ、お前のところに転職しようかな〜。」

「今度の新商品、もうちょっとＨＰ上げように商品開発に依頼できないか？今月出る他社製品が、うちと同じ顧客層狙ってるらしい。」

「げっ！ホントですか？！いや、でもどうかなあ。」

「前回の商品でも同じ依頼して、結局仕上がったの3ヶ月後でしたし、今からじゃ難しいと思いますよ。」

「昨日のテレビの旅行特番見た？やっぱり、草津温泉にしようか？今年は、泉質上がって例年よりＨＰが一割増しみたいだし。」

「旅行全体が一割増しじゃなくて、温泉だけ一割増しでしょ？温泉だけだと普通50で増えても55よ。テレビに騙されてるってそれ。ねえねえ、やっぱり海外行きたくい！つれてって！」

何をするにしても、ＨＰが指標の一つになった。値段とＨＰとを考えて物を決める。それが、主流になった。

ＨＰが消費者行動を決める大きな鍵になることに、多くの企業は目を付けた。ＨＰ格付け会社が乱立し、各自が勝手にポイントを付けていたが、そのうち淘汰され、最終的には各業界No.1の企業だけが生き残った。

そうになると、今度は残った企業内で不正なＨＰ操作が行われるよう

になった。製品のHPデータ管理部門に入り込み、ほんのちよつとだけ評価が高いように偽装するだけで、売り上げが何割も変わるのだから、賄賂や恫喝がまかり通ってしまった。多くの企業が問題に上げられ、目立った不正をしていた一社だけが見せしめに潰され、残りはやむやのうち何となくで生き残った。

HPデータの偽装という事件。

それは、大衆を大いに混乱させた。なにせ、HPとお金こそが自分達の物事を決定する根本であり、それが無いという事はなにも決められないも同義だったからだ。

「ねえ、あの会社の商品のHP偽装だったらしいわよ。」

「そうみたいね。ウチじゃ愛用してたんだけど、ちよつと信用できなくなっちゃうわよね。」

でも、物は悪くないと思ってたんだよね。私は。騙されてたなあ。」

「まあ、製品不良って事とは違うから、あなたのHPが減ってないならそれでいいけど。」

「あー、それは減っちゃった。うちの夫が、別の会社派でね。私が買うからって、メーカー変えちゃったのよ。そこに、この事件でしょ？」

「どーだ、俺が正しいぞみたいな顔されて、イライラしちゃった。」

「あー、わかるわー。なんにも言わずに使ってたくせに、何か起こるとさういふ事言う。イライラするのよね。」

「この前のじゃがいも、HP偽装だったんだって。」

「ホント何信じていいのか分からなくなるよね。同じような、価格だと決められないじゃない。」

「もういっそ、コインでも投げて決めるしか無いのかなあ。」

「でもさ、勘とか運で決めるって最近やって無いよね。いつも、HPとお金で決めてたもん。」

もはや、HP無しで社会はなり立たない所まで来ていた。人々は、HPを絶対的な幸福度の指標として

信じていたし、政府や企業の連合によってある程度公平に保たれたHPの情報は、その人々の要求に応えるものだった。

やがて、HPはその範囲をさらに拡張させる事になる。

……人間関係さえも数値化し始めたのだ。

この人と友人になるとHPでプラスXX、この人とならマイナスXXなどという表記が平然と並ぶようになった。

学校の先生や、職場の上司との付き合いにまで、HPは関連して来た。

この人の話を聞くのはHPにプラスだ。いや、マイナスだ。といった議論がなされた。

結婚や出産に対してもHPが関係して来た。結婚して幸せになるかを決めるのは、HPだし。

生まれてきた子供が幸せになるかを決めるのもHPだった。

人々はこう言った。

”自分の気持ちなどという、小さい尺度で考えるのでは無く、人類の英知たるHPで行動を決めるべきだ。”

HPによって全てが決められる中、一人の人間が声を上げた。

「みんながHPに支配されてしまっている！HPを絶対正しいと信じるのはやめよう！」

彼の声は世間に波紋を投げかけた。

人々は、みなHPの正しさに対してある程度の不信感を持っていたのだ。

確かにHPによって未来を決めるのは、簡単で分かりやすいものだった。

数学の答えのように。解き方の決まった方程式を解くように幸せという答えがそこには、あった。

一方でこう考える人もいた。HPによって示された方程式は、果たして本当に正しいものなのだろうか？と。

しかし、HPを疑問視する声は封殺されていた。なぜならHPを使うことで、不幸せになった人より幸せになった人の方が多かったからだ。その中にはHPにしたがっていれば安心という、事を盲目的に信じて幸せになったと思っている人も居た。

波紋は次第に大きくなった。

政府や企業は、HPの使用を推奨した。製品の評価として、もはや

HPは欠かせなかったし、政権公約にも国民全体のHPの向上が堂々とうたわれていたからだ。

一方で、国民は二つに割れていた。HPの絶対性を信じて疑わない信望者と、HP懐疑派が各所で衝突した。

ついには、暴動にまで発展し、多数の死傷者を出すまでに至った。

暴動が激しくなったある日、懐疑派の行動により事態は急変した。

HPを決定する基幹コンピュータに、一斉にクラッキングが行われ、機能を停止してしまったのだ。

復旧には丸一日以上の時間が必要で、どうやってもすぐにHPのシステムを利用することはできない状態になった。

信望者は嘆いた。”これでもう、我々には確実な幸せを選択する事ができない”と。

翌日の町は、

意外と何事も無く機能した。

人々は、普通に買い物をし、仕事をした。

HPは動かなかったが、少し困惑する以外に、大きな問題は起こらなかったのだ。

ものを買うときに、運任せでどちらが良いか選択する事に恐れを感じる者も居た。

だが一方で、高揚を覚える者も居たのだ。

結局、復旧には一週間が掛かったが、その間に人々はHP無しの生活に慣れてしまった。

HPは前の状態に戻ったが、人々は前ほどHPに依存することが無くなった。

人々は今度はこう言った。

”作られたHPなんかより、自分の信じる物を買ひ、自分の好きな人と付き合った方がずっと満足できるよ”と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8940z/>

幸福度計

2011年12月28日01時55分発行